

大学における野外実習が参加学生のソーシャルスキルに及ぼす効果

近 藤 剛¹

Tsuyoshi KONDO : The Effects of Outdoor Activity Programs on College Students' Social Skills

大学体育実技として展開された学外夏季集中授業である野外実習(2泊3日間)が参加学生のソーシャルスキルに及ぼす影響について評価を試み、今後の効果的な実習運営の示唆を得ると同時に、適切な学生指導の方法としての大学体育実技の可能性について検討した。その結果、大学夏季集中授業として実施した野外実習は参加学生のソーシャルスキルを高める効果を有していること、さらに参加学生のソーシャルスキルは、性差や宿泊形態、食事形態という実施条件の影響は受けないことが明らかとなった。

キーワード：大学生 夏季集中授業 ソーシャルスキル 教育効果

1. 緒言

文部科学省が発表した平成30年度学校基本調査によれば、我が国の大学・短大の進学率は57.9%に達し、過去最高を更新した。しかし、その一方で、入学直後から人間関係に悩み、友人が作れない、居場所がない、コミュニケーションが取れないなど、対人関係やメンタルヘルスに課題を抱える学生が増えていることが指摘され、大学関係者にとって対応に苦慮する大きな問題となっている。

このような対人関係の課題の原因の一つに挙げられるのがソーシャルスキルである。相川ら¹⁾によれば、ソーシャルスキル(Social Skill)とは、対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動と、その対人行動の発現を可能にする認知過程との両方を包含する概念であるとされる。ソーシャルスキルに関する先行研究を概観すると、ソーシャルスキルが高いほど対人関係が良好となりえることが明らかとなっている反面、ソーシャルスキルが低いと対人不安や孤独感、

躁鬱の様相が強くなる傾向があるとされる。したがって、良好な対人関係の構築、コミュニケーション力の向上のためには、個人が有しているソーシャルスキルを高めることが有効な手段であるといえる。

このような中、近年、大学体育実技による取り組みにより、ソーシャルスキルの向上を目指そうとする動きが増えてきている。野口ら²⁾は、大学体育実技において、特にグループワークやコミュニケーションづくりを意識した授業を展開することで、学生の社会的スキルの向上に寄与できたとしている。つまり、大学教育における大学体育を単なる身体運動を学ぶ、体験するという従来型の実践にとどめるのではなく、身体運動を通じた人間力の獲得の機会として展開しているのである。

さて、学生のコミュニケーション能力向上を目指した大学体育の取り組みとして、多くの大学や短期大学で導入展開がなされている組織キャンプやスノースポーツなど、宿泊を伴う集中型の自然体験活動は、集団による活動を特性の一つとしている。活動を共にするメンバーとの的確なコミュニケーション力の発揮が求められ、社会的スキルトレーニングとして位置付けることができ、参加者の社会的スキルの獲得を図ることが可能と考える。

1 鳥取短期大学幼児教育保育学科

実際にキャンプ場を社会的スキルトレーニングとして位置づけ、その効果の検証が試みられている。長期継続型のデイ・キャンプに参加した小学生のソーシャルスキルは、デイ・キャンプ終了後に有意に向上する結果もある³⁾。また組織キャンプの体験により、小学5・6年生の社会的スキルのうち、「引込み思案行動」「攻撃行動」といった社会的スキルの変容は認められなかったが、「向社会的スキル」はポジティブな方向に改善される⁴⁾、など複数の報告例がある。

ただ、大学生を対象とした研究では、組織キャンプに参加した短大生のソーシャルスキルに及ぼす影響について検討した吉田⁵⁾は、1泊2日の日程の限界があり、挨拶や自己紹介といった初歩的なソーシャルスキルの認知にはプラスの影響を示すものの、高度なソーシャルスキルには影響を及ぼさなかったと報告している。一方、古賀ら⁶⁾は、学外集中授業として実施した3泊4日の「富士登山キャンプ」の教育効果の一つとして、大学生のソーシャル

スキルへの影響を調べたところ、一定の効果が認められると報告するなど、さらなる研究の蓄積が求められる状況にあるともいえる。

そこで本研究は、大学体育実技として展開された夏季集中授業である野外実習（2泊3日間）の教育効果について評価を試みるにあたり、参加学生のソーシャルスキルを指標として用いることで、今後の効果的な運営に資すると同時に、適切な学生指導の方法としての大学体育実技の可能性について検討する。

2. 研究方法

(1) 調査対象

平成28年9月中旬に鳥取県大山国立公園内で実施された2つの大学の野外実習（A実習、B実習）ならびにその実習に参加した大学生30名を調査対象とした（有効回答率100%）。分析対象者の実習別、性別の内訳は表1に示す。

調査対象となった2つの大学の野外実習は、宿泊形態（テント泊／宿舎泊の違い）、食事形態（野外炊事による自炊／宿舎提供食）は異なるものの、実施時期（9月中旬）、日数（2泊3日）、場所（大山国立公園内）、活動内容がほぼ同様であった。主な活動内容を表2に示した。

表1 調査対象（人数）

	男	女	計	平均年齢 (SD)
A実習	5	7	12	20.36 (2.43)
B実習	6	12	18	19.44 (1.15)
合計	11	19	30	19.92 (1.95)

表2 活動プログラム

A実習 (A大学)				B実習 (B大学)		
1日目	2日目	3日目	日程	1日目	2日目	3日目
晴	晴	晴	天候	晴	曇	晴
現地集合	朝食 大山トレッキング 出発	朝食 選択活動 1) 乗馬 2) カヤック 3) フィッシング	7:00 9:00	大学出発 現地着 開講式 テント設営 持参弁当 A.S.E. 環境整備 アウトドア クッキング	朝食づくり 大山トレッキング 出発 山頂 行動食 (コンロ)	朝食づくり 選択活動 1) 燻製作り 2) カヤック 3) 歴史探訪 昼食づくり サイト撤収 振り返り 閉講式 バス移動
〈弁当〉 開講式 A.S.E. 歴史文化 見聞散策 夕食	〈弁当〉	〈弁当〉 閉講式 現地解散	12:00 15:00 18:00		サイト帰着 温泉入浴 生還パーティ	
班別ミーティング 消灯 (宿舎泊)	トレッキング報告 消灯 (宿舎泊)			班別ミーティング 消灯 (テント泊)	消灯 (テント泊)	

(2) 調査および手続き

1) ソーシャルスキル尺度

相川ら¹⁾が開発した「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」を採用した。この尺度は、コミュニケーションスキルと対人スキルの2つの側面から同時に的確にとらえることができる、汎用性のあるものとして開発されたものであり、一定の信頼性と妥当性が確認されている。「関係開始」「解説」「主張性」「感情統制」「関係維持」「記号化」の6つの下位因子、35項目で構成され、「1. ほとんどあてはまらない」から「4. とてもあてはまる」までの4件法で回答を求めた。

2) 調査時期

A実習およびB実習ともに、実習地に到着する直前（実習前）と、実習の全日程が終了した直後（実習後）の2回実施した。調査方法は、実習前、実習後ともに自記式の質問紙を用いた集合法で行った。

3) 分析方法

ソーシャルスキル尺度の回答結果は、ソーシャルスキルが高いほど高得点となるように1点から4点に得点化し、全35項目を合算したソーシャルスキル得点と、6つの下位因子毎に属する項目の得点を合算した因子得点を算出した。逆転項目については得点の逆転処理を行った（表3）。その後、各得点の平均値と標準偏差を算出した。さらに、野外実習

表3 野外実習前後のソーシャルスキル得点の変化（35項目別）

ソーシャルスキル尺度項目		実習前 (N=30)		実習後 (N=30)		t 値 (df=29)
因子	質問内容	Mean	SD	Mean	SD	
関係開始	1 相手とすぐにうちとける	2.53	1.01	2.87	0.57	-2.28*
	6 誰とでもすぐ仲良くなれる	2.50	0.82	2.60	0.72	-0.90
	10 知らない人とでも、すぐに会話を始められる	2.60	1.00	2.90	0.80	-2.76**
	14 人と話すのが得意である	2.40	0.93	2.47	0.82	-0.81
	19 他人が話しているところに、気軽に参加する	2.10	0.80	2.43	0.86	-2.76**
	23 誰にでも気軽に挨拶できる	2.67	0.88	3.23	0.90	-4.57***
	27 知り合いになりたいと思っても、話のきっかけを見出すのがむずかしい (-)	2.03	0.81	2.33	0.92	-1.96
31 初対面の人に、自己紹介がうまくできる	2.27	0.79	2.43	0.86	-1.31	
解説	2 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる	2.60	0.72	2.73	0.69	-1.07
	7 顔つきから相手の感情が読み取れる	2.63	0.77	2.70	0.60	-0.57
	11 話をしているとき、相手の表情のわずかな変化も感じとれる	2.57	0.63	2.73	0.58	-1.54
	15 自分の言葉が相手にどのように受け取られたか察しがつく	2.80	0.81	2.80	0.61	0.00
	20 嘘をつかれても、たいてい見破ることができる	2.17	0.70	2.27	0.83	-0.68
	24 相手の目を見て、自分が何か不適切なことを言ってしまったことに気づく	2.83	0.75	2.97	0.72	-0.94
28 初対面でも、少し話をすれば相手がどんな人かだいたいわかる	2.33	0.71	2.73	0.69	-2.56	
32 自分に関心を持っている人はすぐに見分けられる	2.33	0.80	2.47	0.82	-0.89**	
主張性	3 自分が不愉快な思いをさせられた時には、はっきりと苦情を言う	2.23	0.77	2.30	0.75	-0.49
	8 友だちが自分の気持ちを傷つけたら、そのことをはっきり伝える	2.27	0.83	2.43	0.77	-1.15
	12 どんなに親しい人に頼まれても、やりたくないことははっきりと断る	2.77	0.97	2.60	1.00	1.15
	16 人の話の内容が間違いだと思ったときには、自分の考えを述べるようにしている	2.87	0.78	3.00	0.70	-1.16
	21 どちらかといえば自分の意見を気軽に言うほうだ	2.57	0.82	2.70	0.84	-1.07
	25 たとえ人から非難されたとしても、うまく片付けることができる	2.23	0.73	2.27	0.74	-0.25
29 相手と意見がことなることをさりげなく示すことができる	2.33	0.71	2.87	0.73	-4.00	
感情統制	4 気持ちをおさえようとしても、それが顔に現れてしまう (-)	2.37	1.00	2.60	0.89	-1.49***
	13 困ったときは顔にでやすい (-)	1.90	0.71	1.97	0.85	-0.42
	17 感情をあまり面（おもて）に表わさないでいられる	2.50	0.90	2.50	0.90	0.00
	30 自分の感情をコントロールするのが苦手である (-)	2.87	0.73	2.73	0.87	1.16
関係維持	5 相手の立場を考えて行動する	3.00	0.79	3.20	0.48	-1.29
	18 その場にあった行動がとれる	2.93	0.45	3.13	0.57	-1.80
	26 相手の話をまじめな態度で聞くことができる	3.17	0.91	3.47	0.68	-1.80
	34 まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できる	2.27	0.64	2.53	0.78	-2.28
記号化	9 表情が豊かである	2.70	0.95	2.80	0.81	-0.68*
	22 身振り手振りを交えて話すのが得意である	2.57	0.77	2.80	0.76	-2.04
	33 相手に良い感じをもったら、それを素直に表現できる	2.97	0.72	3.20	0.71	-2.25*
	35 感情を素直にあらわせる	2.77	0.77	3.03	0.89	-1.68*

(-) …逆転項目

***p<.001 **p<.01 *p<.05

の経験が参加学生のソーシャルスキルにどのような影響を及ぼしているか明らかにするため、ソーシャルスキル得点と、各因子得点を従属変数とした有意差検定（t検定, f検定）を実施した。

4) 倫理的配慮

調査にあたっては、調査の目的や内容、得られたデータの処理や公開の範囲、個人情報の取り扱い等について十分な説明を質問紙の表紙に明記するとともに、口頭においても説明を加えた。さらに、調査への不参加も認めること、不参加の場合も一切の不利益を被ることがないことを説明した。

3. 研究結果

(1) 野外実習前後のソーシャルスキル得点の変化

野外実習前後のソーシャルスキルの変化を明らかにするために、野外実習前後のソーシャルスキル尺度の項目別得点を表4に、ソーシャルスキル得点(全35項目の合計得点)ならびに因子毎の得点の平均

値と標準偏差を表5に示し、その変化について図1に示した。

まず、ソーシャルスキル尺度の項目別得点を野外実習前後でt検定を用いて比較をしたところ、35項目中9項目に野外実習後に有意な得点向上がみられた(表3)。次に、野外実習前後のソーシャルスキル得点について比較した結果、野外実習前にくらべ、野外実習後のソーシャルスキル得点が有意に向上することが明らかとなった ($t(29) = -5.77, p < .001$)。

さらに、ソーシャルスキル尺度の下位因子について検討するため、因子毎に得点化し合算した因子得点について、t検定を実施した結果、6つで構成されるすべての因子のうち、「関係開始」($t(29) = -3.24, p < .001$)、「解読」($t(29) = -2.77, p < .01$)、「主張性」($t(29) = -2.67, p < .01$)、「関係維持」($t(29) = -3.17, p < .001$)、「記号化」($t(29) = -2.07, p < .05$)に有意差が認められたが、「感情統制」は有意な変化を示すことはなかった。

表4 野外実習前後のソーシャルスキル得点の変化

因子	実習前 (N=30)		実習後 (N=30)		t 値 (df=29)
	Mean	SD	Mean	SD	
ソーシャルスキル得点	88.63	12.36	94.80	10.31	-5.77 ***
F1 関係開始	20.33	4.67	21.60	3.81	-3.24 ***
F2 解読	20.26	3.71	21.40	3.31	-2.77 **
F3 主張性	17.27	3.54	18.17	3.39	-2.67 **
F4 感情統制	10.37	1.71	10.20	1.61	0.55
F5 関係維持	11.36	1.73	12.33	1.54	-3.17 ***
F6 記号化	11.27	2.43	11.83	2.39	-2.07 *

***p<.001 **p<.01 *p<.05

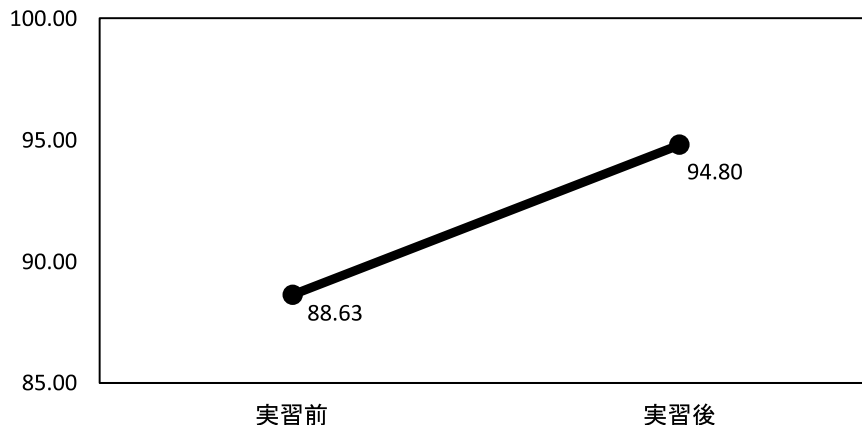


図1 野外実習前後のソーシャルスキル得点の変化

(2) 野外実習前後のソーシャルスキル得点と男女差

野外実習前後のソーシャルスキルの変化に及ぼす性差の影響を明らかにするために、野外実習前後のソーシャルスキル得点ならびに因子毎の得点について、男女別の平均値と標準偏差を表5に示し、その変化について図2に示した。

まず、性差（男女）と調査時期（実習直前、直後）の2要因混合計画によるf検定を実施した結果、交互作用および性差の主効果は有意ではなく、調査時期の主効果（ $f(1/28) = 30.48, p < .001$ ）のみ有意であった。この結果、野外実習の経験が及ぼす学生のソーシャルスキルの変化は性差の影響は受けにくいことが確認された。

また、6つの因子得点別に、性差と調査時期の影響を確認するため、性差（2）×調査時期（2）の2要因混合計画によるf検定を実施した。その結果、すべての因子において、交互作用ならびに性差の主効果は認められず、「感情統制」以外の5つの因子において調査時期の主効果が認められることにとど

まった（「関係開始」 $f(1/28) = 8.41, p < .001$ 、「解説」 $f(1/28) = 7.54, p < .01$ 、「主張性」 $f(1/28) = 5.51, p < .05$ 、「関係維持」 $f(1/28) = 10.46, p < .01$ 、「記号化」 $f(1/28) = 5.72, p < .05$ ）。

(3) 野外実習前後のソーシャルスキル得点と野外実習の実施条件

組織キャンプ経験と生きる力の関係を明らかにした橋ら⁷⁾によれば、組織キャンプの実施状況が、より原始的で精神的にハードになるほど、参加者の生きる力に及ぼす影響にプラスの効果を生み出すとされている。今回の調査対象であるA実習とB実習は、実施時期、日数、場所、活動内容はほぼ同様であるが、宿泊形態（テント泊／宿舍泊の違い）、食事形態（野外炊事による自炊／宿舍提供食）が異なるものであり、A実習とB実習を比較することにより、実施条件の影響を検討することは十分可能であると判断した。

そこで、野外実習前後のソーシャルスキルの変化

表5 野外実習前後のソーシャルスキル得点の変化（男女別）

因子	男 (N=11)				女 (N=19)				調査時期 f 値 (df = 1,28)	性 f 値 (df = 1,28)	交互作用 f 値 (df = 1,28)
	実習前		実習後		実習前		実習後				
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD			
ソーシャルスキル得点	89.91	14.24	96.36	12.90	87.90	11.49	93.90	8.75	30.48***	0.28	0.04
F1 関係開始	21.00	4.49	22.09	4.32	19.47	4.80	21.32	3.58	8.41***	0.55	0.52
F2 解説	19.09	4.21	20.45	3.75	20.95	3.32	21.95	2.99	7.54**	1.81	0.18
F3 主張性	18.45	3.30	19.00	3.44	16.58	3.58	17.68	3.30	5.51*	1.62	0.63
F4 感情統制	9.82	1.78	9.72	2.28	10.68	1.63	10.47	1.71	0.22	2.29	0.04
F5 関係維持	11.18	1.94	12.45	1.69	11.47	1.65	12.26	1.48	10.46**	0.09	0.57
F6 記号化	11.27	1.90	12.45	2.38	10.84	2.69	11.47	2.38	5.72*	0.72	0.53

***p<.001 **p<.01 *p<.05

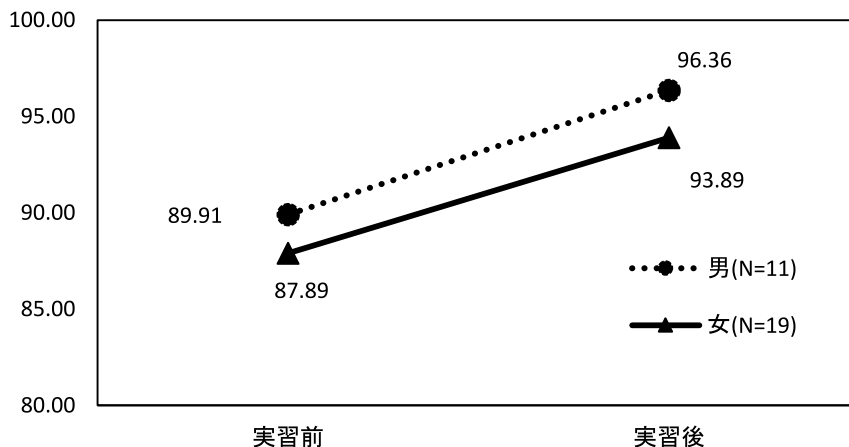


図2 野外実習前後のソーシャルスキル得点の変化（男女別）

表6 野外実習前後のソーシャルスキル得点の変化（実施条件別）

因子	宿舎泊&食事提供型 (A 実習 N=12)				テント泊&野外炊事型 (B 実習 N=18)				調査時期 f 値 (df= 1,28)	性 f 値 (df= 1,28)	交互作用 f 値 (df= 1,28)
	実習前		実習後		実習前		実習後				
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD			
ソーシャルスキル得点	86.33	13.63	93.91	11.78	92.94	9.53	96.61	8.77	22.80***	1.49	2.76
F1 関係開始	19.08	4.94	21.58	3.60	20.67	4.51	21.61	4.05	12.86***	0.27	2.62
F2 解読	18.75	4.16	20.83	3.79	21.28	3.10	21.78	3.00	10.56***	2.02	3.97
F3 主張性	16.33	3.31	17.89	3.64	17.33	3.84	18.72	3.56	6.89*	1.41	0.06
F4 感情統制	10.58	1.93	10.17	2.17	10.22	1.59	10.22	1.17	0.44	0.08	0.44
F5 関係維持	11.25	2.05	12.75	1.29	11.44	1.54	12.06	1.66	11.94***	0.64	2.12
F6 記号化	10.33	2.27	11.25	2.38	11.44	2.45	12.22	2.39	5.08*	0.20	0.03

***p<.001 **p<.01 *p<.05

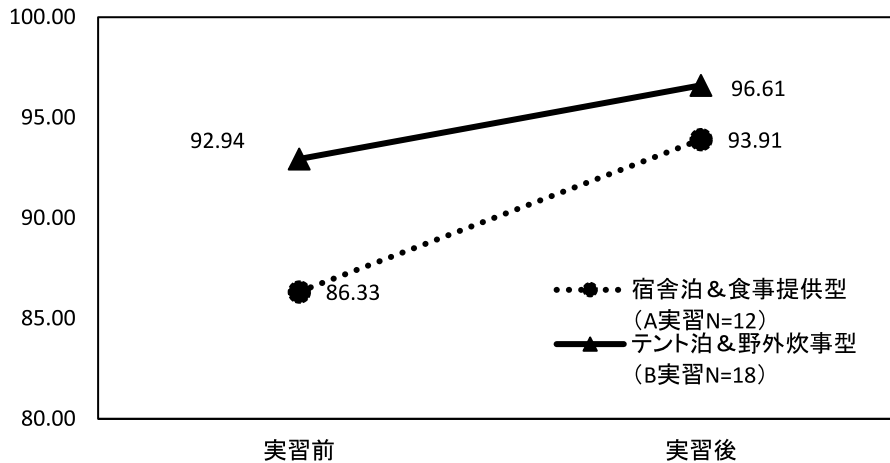


図3 野外実習前後のソーシャルスキル得点の変化（実施条件別）

に及ぼす実施条件の影響を明らかにするために、野外実習前後のソーシャルスキル得点ならびに因子毎の得点について、実施条件別の平均値と標準偏差を表6に示し、その変化について図3に示した。その後、実施条件(2)×調査時期(2)の2要因混合計画によるf検定を実施した。その結果、交互作用ならびに実施条件の主効果は認められず、調査時期の主効果のみ ($f(1/28) = 22.80, p < .001$)、有意であった。また、6つの因子得点別に、実施条件と調査時期の影響を確認するため、同じくf検定を実施した。その結果、すべての因子において、交互作用ならびに実施条件の主効果は認められず、「関係開始」($f(1/28) = 12.86, p < .001$)、「解読」($f(1/28) = 10.56, p < .001$)、「主張性」($f(1/28) = 6.89, p < .05$)、「関係維持」($f(1/28) = 11.94, p < .001$)、「記号化」($f(1/28) = 5.08, p < .05$)にのみ、調査時期の主効果が認められた。「感情統制」因子は実施条件、調査時期ともに主効果は見られなかった。

4. 考察

以上の結果、今回の調査対象となった参加学生のソーシャルスキルは、自身の気持ちや感情を抑える要素である「感情統制」スキルを除いた、「関係開始」、「解読」、「主張性」、「関係維持」、「記号化」スキルにおいて、野外実習に参加することにより向上することが明らかとなった。また、その影響は性差や実施条件には影響されなかった。

野外キャンプ直後の1泊2日のキャンプに参加した短期大学生の社会的スキルへの影響を検討した吉田⁵⁾は、短期間では十分にソーシャルスキルの獲得はできないかもしれないと述べている。本研究対象である野外実習の実習期間は、2泊3日間であり、決して十分な日程であるとは言えない。しかし、初日の仲間づくり体験(イニシアティブ・ゲーム)、環境整備や野外炊事等を通じたグループ活動で生じ

る対人交渉過程, 2日目のトレッキング等, 毎日の活動そのものがグループワークであったといえよう。その結果, 日数ではなく, 人間関係におけるトレーニングとして十分な効果が得られたのではないだろうか。コミュニケーション能力向上を目的とした体験学習の効果について評価を試みた塚田⁸⁾は, 講義の中に人間関係トレーニングの手法を取り入れた授業を展開することで, 学生のソーシャルスキルのうち, 関係維持のスキルや記号化のスキルにプラスの影響を及ぼすとしていた。本研究でも, ソーシャルスキル尺度 35 項目ごとの野外実習前後の有意な変化を見せた 9 項目の内訳は, 「関係維持」因子 4 項目 (8 項目中), 「記号化」因子 3 項目 (4 項目中) であった。以上のことから, 今回の調査対象である野外実習は, 2泊3日間という短期間であっても, ソーシャルスキルの獲得に十分な, コミュニケーション能力を向上させるためのトレーニング効果を有するといえるだろう。

次に, 前述の通り, 一定の効果が認められた一方で, ソーシャルスキルの下位因子「感情統制」のスキルについては, 野外実習の効果について認められなかった。今回採用したソーシャルスキル尺度を開発した相川ら¹⁾は, 「感情統制」因子は, 他の尺度とは異質であり, 負の相関関係にあると説明を加えている。この点も踏まえると, 野外実習に参加することによって他の因子のスキルが高まった結果, 「感情統制」への影響は抑制された, とも理解できるかもしれない。「気持ちをおさえようとしてもそれが顔に現れてしまう」「困ったときは顔にしやすい」「感情をあまり面(おもて)に表わさないでいられる」「自分の感情をコントロールするのが苦手である」という尺度で構成される感情統制の下位因子であるが, 単なるスキルではなく性格や特性にかかわる側面を評価する意味合いが強く, 数日間の一過的な体験では変容がしにくい要素であるとも考えることもできる。ソーシャルスキルをより正確に測定する尺度や調査用紙の開発をはじめ, 近接領域の変数を用いたアプローチも必要だろう。

最後に, 野外実習の実施条件として選定した活動内容の困難度は, 参加者の生きる力や自然認識に影響を及ぼすという先行研究の存在をもとに, 困難な場面が増えれば, グループの凝集性も高まり, 対人交渉過程においても大きな変化がみられることが予想され, 参加者のソーシャルスキルにも何らかの影響がもたらされるのではないかと仮説を立て検証を試みたが, 今回においては実施条件の違いによる影響は確認されなかった。しかしながら, 結論付けるには尚早であり, 今後も研究を継続し, 結果の蓄積をしていく必要があるだろう。

5. まとめ

本研究では, 大学体育実技として展開された学外夏季集中授業である野外実習 (2泊3日間) が参加学生のソーシャルスキルに及ぼす影響について評価を試みることで, 今後の効果的な実習運営の示唆を得ると同時に, 適切な学生指導の方法としての大学体育実技の可能性について検討した。その結果, 以下のことが明らかとなった。

- (1) 大学夏季集中授業として実施した野外実習は, 参加した学生のソーシャルスキルを高める教育効果を有していた。
- (2) 参加学生のソーシャルスキルの向上には, 性差, 宿泊形態や食事形態という実施条件の影響は受けなかった。

以上のように, 今回の対象となった野外実習が有する参加学生のソーシャルスキルへの教育効果を明らかにすることができた。しかし, 調査対象が極端に限られている, 野外実習に参加していない対照群 (統制群) が未設定, など, その効果や影響は極めて限定的であると言わざるを得ない。

今後は, ソーシャルスキルの効果的な獲得を念頭にいた活動プログラムや指導内容などを組み込み, さらなる知見を重ねていく必要があるだろう。

大学で野外キャンプを展開している加藤ら⁹⁾は,

野外キャンプに参加した学生のレポートに記載された内容を分析すると、コミュニケーション力に関する記述件数が圧倒的に多いと報告をしている。それだけ、参加学生自身に自覚と気づきを促すことができる授業であること、その自覚したコミュニケーション力の獲得の一助となる実践根拠のある授業科目としてPRできることの意義は大きいと考える。

引用・参考文献

- 1) 相川充・藤田正美「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成」, 『東京学芸大学紀要』1 部門 56 (2005), pp. 87-93.
- 2) 野口和行・須田芳正・村松憲・村山光義・加藤大仁「学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み」, 『慶應義塾大学体育研究所紀要』52(1)(2013), pp. 11-20.
- 3) 小山諒・岡村泰斗・井村仁「長期継続型デイ・キャンプが参加児童の社会的スキルに及ぼす効果～キャンプ場面による学習と日常場面への般化の関連に着目して」, 『国立青少年教育振興機構研究紀要』(8) (2008), pp. 65-75.
- 4) 西田順一・橋本公雄・徳永幹雄・柳敏晴「組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果」, 『野外教育研究』第5巻2 (2002), pp. 45-54.
- 5) 吉田充「キャンプ体験が短期大学生の自尊感情と社会的スキルに与える影響」, 『國學院短期大学紀要』24 (2007), pp. 3-14.
- 6) 古賀初・加藤知己・木村憲「大学生の社会的スキルおよび自己効力感に対する「富士登山キャンプ」の教育効果」, 『東京電機大学総合文化研究』第14号 (2016), pp. 195-198.
- 7) 橘直隆・平野吉直・関根章文「長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響」, 『野外教育研究』第6巻2 (2003), pp. 45-56.
- 8) 塚田知香「コミュニケーション能力向上を目的とした体験学習の実践」, 『東京成徳大学経営論集』第3号 (2014), pp. 25-32.
- 9) 加藤敏明・近藤剛「野外キャンプ授業が学生に及ぼした効果～健康スポーツ科学実技として新規に開講した授業の報告～」, 『大学教育研究年報』20号 (2015), pp. 75-80.
- 10) 須田和也「大学生の社会的スキルとスポーツ経験および運動有能感に関する研究」, 『共栄大学研究論集』9 (2011), pp. 37-53.